第２章　焼津市の歴史的環境

１　歴史的環境

焼津市は、コンパクトな市域に海・山・平野があり、それぞれに特色ある歴史文化が育まれてきました。

３つの港を持つ駿河湾沿岸部は南北に長く、漁業に関する生活文化や、海運基地としての「湊」の歴史から、独自の文化財が残されています。浜通りは焼津漁業発祥の地として知られます。北の浜当目や南の吉永（よしなが）では製塩が行われた記録が伝わります。雄大な富士山を望む景勝地（けいしょうち）でもある和田浜では、かつては地引網漁が盛んでした。南北に 15.5km 続く海浜部では、現在では焼津漁港のマグロ・カツオ、小川漁港のサバ、大井川港のシラスやサクラエビといった遠洋漁業や駿河湾での特有の漁業が営まれています。

焼津市の山地は市域全体の４％程度と狭く北方に集約されますが、古墳や山城（やまじろ）などの遺跡が残り、駿府（すんぷ）（静岡市）への旧街道が通る山麓には指定文化財も多く、希少種が植生する山としても知られ、またミカン・茶などの商品作物の栽培地として人々の活動の重要な拠点でした。

市域の大半を占める扇状地は、北の瀬戸川･朝比奈川流域と、南の大井川流域に大別されます。平野部では豊富な伏流水と肥沃な土壌を活かして昔から農業が盛んで水田が広がり、トマトや志太梨といわれる梨の栽培も続いています。古墳時代の集落や水田跡、中世の城跡が発見され、古代の記録にも地名が残るなど、人々の永続的な営みが刻まれています。

現在、焼津市には東益津、大村、焼津、豊田、小川、大富、和田、港、大井川の９地区があり、それぞれ地名を冠した中学校と公民館が置かれています。各地区には様々な祭りや社会的まとまりがあり、すべての活動が一体的に行われる訳ではありませんが、公民館を中心としたまちづくりのコミュニティ活動は活発です。

市域は山間部と河川の流域ごとに、おおむね朝比奈川以北の高草山周辺域（東益津区域）、瀬戸川流域（大村・焼津・豊田・小川区域）、旧大井川本流域（大富・和田・港区域）、現大井川左岸域（大井川区域）の４地区にまとめられます。旧大井川本流域と現大井川左岸域は、大井川が形成した同じ志太平野の東端部で、地理的にも文化的にも似通っていますが、現在の行政区分も鑑みて設定しています。また、瀬戸川流域も、藤枝市域を含め大きくは大井川低地（志太平野）として結ばれ、各地域には関連した歴史文化が認められます。

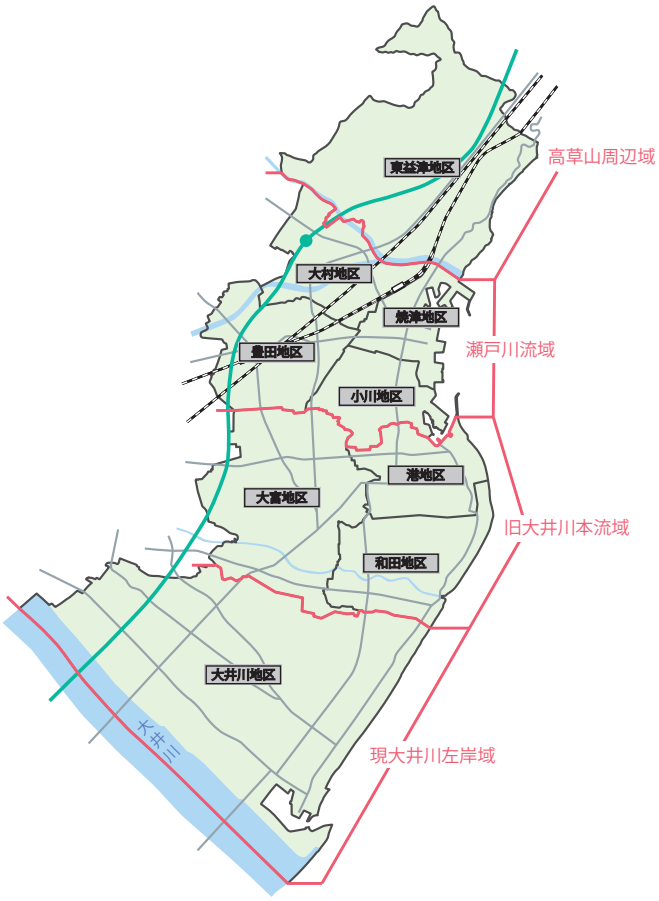


図 2-1　地域と地区の区分

2　時代ごとの概要

（1）焼津の黎明期－縄文・弥生・古墳時代－

焼津市では旧石器時代の遺跡はなく、縄文時代（前14,000年頃～前1,000年頃）の遺跡も2ヵ所しか発見されておらず、弥生時代（前1,000年頃～後250年頃）以前の実態はほとんど分かっていません。これは低地ゆえに、海や河川の変動によって遺跡が消滅している可能性も考えておくべきです。弥生時代以降は低地のなかでも少し高い地点（微高地）を選んで集落が形成され、古墳時代には焼津神社の杜が所在する焼津微高地や、その南側の小川微高地に拠点的な集落が営まれ、人の足跡が残る水田跡も発見されています。遺跡は粘土層に営まれており、遺跡自体も粘土でパックされ有機質が腐食しにくい状態で残存していることから、ローム層などでは確認しがたい貴重な木製品が多量に発見されています。資料の主なものは保存処理を行い、焼津市歴史民俗資料館内で一部を常設展示しています。

高草山の山麓から中腹にかけては古墳時代後期の群集墳が多く確認されています。高いところでは標高300ｍ地点にも造られています。古墳のなかには線刻画が描かれた例もあります。また、市指定文化財の六鈴鏡など、古墳から出土した副葬品には学術的価値が高い資料があります。一部の古墳は現地で、資料は焼津市歴史民俗資料館で見学することができます。

なお、この焼津の黎明期を伝える記録として、『古事記』『日本書紀』の日本武尊の伝承があり、焼津の地名の由来として語られます。焼津市域には大井川左岸から高草山まで日本武尊にまつわる伝承地が10ヵ所に残り、焼津の歴史に根ざした存在として、信仰の対象となっています。

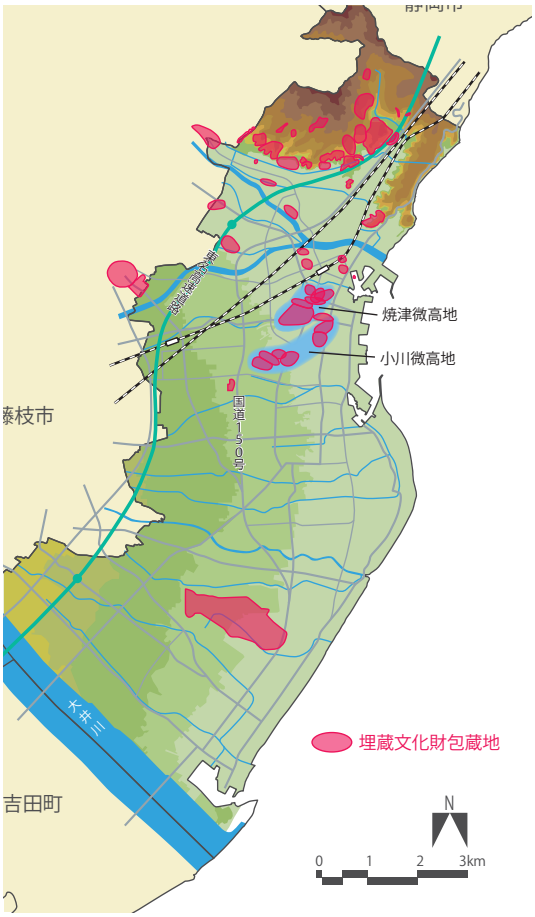


図 2-2　焼津市内の遺跡の位置

写真 2-1　高草山の群集墳（兎沢７号墳）

（2）古代のカツオ漁と東海道－奈良・平安時代－

古代、焼津市域は藤枝市の一部とともに駿河国益頭郡に属しており、また藤枝市にあった志太郡とも関わりがあったと推定されます。中央との関係を示す当時の文字資料も残されています。また、奈良県の平城京二条大路跡から出土した天平期（729～749）

の木簡群にも、益頭郡から堅魚（カツオ）を貢進した際の付札が出土しています。このほか、長岡京などから多く見つかる「壺Ｇ」と呼ばれる形の容器（コラム参照）と同じものが市内大村地区の大覚寺遺跡で出土しています。カツオ漁に関係するという説があり、当時の都との関係も示す貴重な資料です。「壺Ｇ」は藤枝市域の助宗古窯において製造されたものです。律令制度成立後の古代国家体制においても、隣接する藤枝市域と密接した関係にあったことを示すひとつの例でもあります。

古代の文献には、焼津にまつわる地名がみられます。『倭名類聚抄』に「小河」の地名があり、現在の小川地区が比定地となっています。また小川は『延喜式』においても「小川駅」と記されており、古代の駅家の推定地でもあります。小川地区での道場田・小川城遺跡の発掘調査では、公的機関の存在を示唆するこの時代の銅印も発見されています。『延喜式』には、現在の大井川本流右岸の「初倉駅」から「小川駅」を経て、日本坂峠を越え有度郡（現在の静岡市南部）を結ぶ街道が記されており、このルートは古代の東海道筋と推定されています。東海道は、平安中期以降は藤枝市域の「蔦の細道」へ移りますが、焼津市域ルートは中世、近世、近代にも引続き往来は盛んでした。

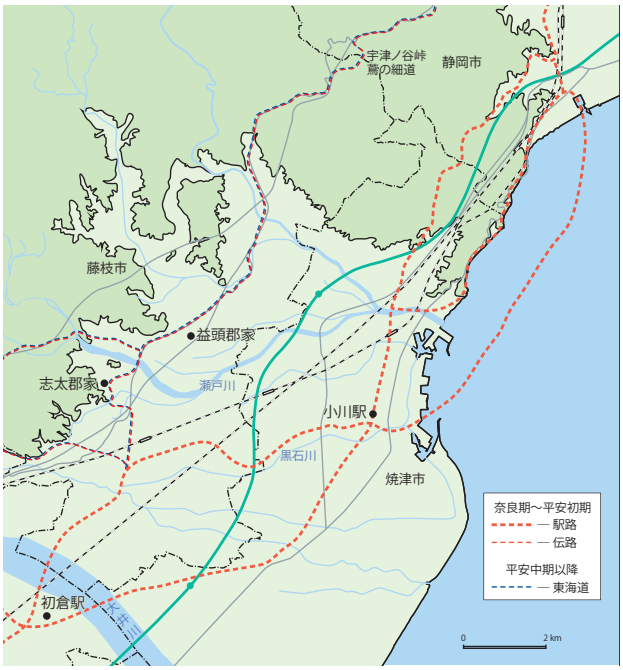


図 2-3　古代東海道推定地と「小河（川）駅」

写真 2-2　焼津市内から発見された「壺Ｇ」と関連土器

なお、小川城遺跡からは「七郎丸」の墨書がある 12 世紀ころの土器が出ており支配層の存在が指摘されています。

コラム：「壺Ｇ」と「堅魚煎汁」

「壺Ｇ」は８世紀半ばから９世紀前半ころにかけて作られた長頸壺の呼称のひとつです。奈良文化財研究所が須恵器の壺の形状をアルファベット順に分類した中で「Ｇ類」に定めたため、このように呼ばれるようになりました。静岡県内では藤枝市のほか、伊豆の国市と湖西市の３ヵ所の官営の窯で焼かれました。「壺Ｇ」は当時の都の長岡京や平城京で見つかっており、そのほかの出土地は静岡県に集中しています。これらのことから、この壺の用途は駿河国の税として納められていた「堅魚煎汁」、今でいう煮凝りに似た食材を都に運搬する容器とする説があります。このほかにも水筒説、花瓶説などがあり、まだ説は定まっていませんが、当時の物流を考える貴重な資料となっています。

（３）南北朝の動乱と今川支配－鎌倉・室町時代－

平安末期、荘園制のもとで伊勢神宮外宮の荘園だった小楊津御厨と内宮領の方上御厨（11 世紀～ 15 世紀）が存在したことが知られます。また、益頭庄、初倉庄などが成立していましたが、鎌倉時代に入ると武家政権の成立とともに制度が崩れ、さらに今川氏が守護となって、焼津市域も南北朝時代以降の勢力争いの時代に入ります。

源頼朝（1147-1199）が地頭職任命権を得た文治元年（1185）の後、益頭庄については、執権北条氏が地頭職となりました。地頭になった北条時政（1138-1215）は幕府の実力者で性格が傲慢だったといわれ、経営を引き受ける者がなく、そのため、益頭庄は源頼朝が治める関東御領（将軍家直轄領）となりました。

室町幕府樹立後、今川範国（?-1384）が駿河国の守護となり、焼津市域の一部もその所領となりました。当時の資料に残る八楠、塩津、焼津、中根、田尻などの郷名や、方上（方ノ上）、小楊津（小柳津）など御厨の名称は現在の字名にも通じるものです。室町時代の前半は南北朝の動乱期であり、駿河守護の今川範国は足利尊氏（1305-1358）と行動を共にし、北朝方として戦っていました。北朝、南朝に加え、足利直義（1307-1352）派がまみえるという勢力関係のなか、今川方の軍勢は一時、小川に駐屯していたことが知られます。一方、市内には南朝方の後醍醐天皇（1288-1339）を祀る猪之谷神社や天皇神社などがあり、また宗良親王（1311-1385）や興良親王（1331-?）に関する言い伝えも残ります。古くから交通の要所であった焼津市域は、せめぎ合いの舞台となることも多かったと推測されます。

（４）早雲から家康へ－戦国時代－

15 世紀、小川の地に小川城がおかれていました。小川城は今川家に属す長谷川氏が城主をつとめ、15 世紀後半から 16 世紀の長谷川正宣（1427-1513）、元長（?-1560）、正長（1536-1573）の時代には、幅約 13 mの巨大な堀で囲まれた土塁を伴う長辺約 150 m、短辺約 90 mの館が築かれていました。正宣が城主の時期、今川家に家督争いが起こり、正宣は今川義忠の嫡子である竜王丸（氏親 /?-1526）を城に庇護しました。この今川家の内紛を調停するために都から下ってきたのが北条早雲（?-1519　この時の通名は伊勢新九郎盛時）です。早雲は石脇城を拠点として駿府（現静岡市）にいた小鹿範満（?-1487）を倒して氏親を当主とし、その功をもって出世しました。後に伊豆を切り取るなどして後北条家の基礎を築き、戦国大名のさきがけとなったことから、石脇城が別名出世城といわれる由縁です。

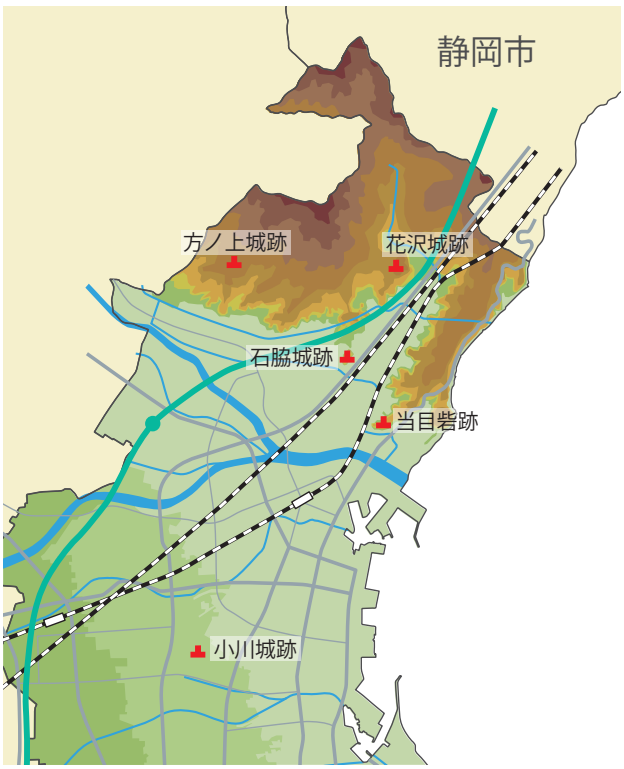


図 2-4　市内に残る戦国時代の城跡

図 2-5　中世の海運と湊

小川城は、小河（川）駅の時代から続く陸路の要衝にあると同時に、現在の浜通りの沖合にあった小河湊を押さえていました。小河湊は、海運の基地として大小の船で混雑し道も人であふれるなど、たいへん繁盛していたことが当時の日記に記されています。長谷川氏は高草山山麓の古刹で市指定文化財を複数有する林叟院の開基でもあり、「山西の有徳人」といわれ敬われました。長谷川氏の子孫は後に徳川政権下に入ります。焼津の生まれではありませんが、『鬼平犯科帳』で知られる“鬼の平蔵”こと長谷川平蔵（宣以/1745-1795）も長谷川氏の子孫です。

戦国時代の焼津市域は群雄相まみえる土地でした。今川家では代替わりのたびに家督争いが起こり、今川義元（1519-1560）が家督を継いだ兄弟の争いである花蔵の乱（天文５年（1536））では、高草山山麓に構えられた方ノ上城も戦いの舞台となりました。元亀元年（1570）には武田信玄

写真 2-3　小川城遺跡から発掘された堀（幅約 13m）

写真 2-4　花沢城跡に残る堀切

コラム：北条早雲という名まえ

北条早雲は司馬遼太郎の『箱根の坂』、早乙女貢の『北条早雲』など多くの小説に取り上げられる人気の武将です。ほとんどの作品で「北条早雲」として紹介されていますが、存命中にこう名乗ったことはありませんでした。早雲は姓を「伊勢」、名を「新九郎」、諱を「盛時」といい、のちに出家して早雲庵宗瑞と改めました。早雲はあくまで伊勢氏を名乗っており、北条を使うのは息子の氏綱の代になってからですが、関東一円の大大名になった北条家の初代とされるため、生前・死後の姓名が組み合わさったといわれます。因みに、石脇城に早雲が拠っていたことを示す古文書（大道寺盛昌書状　江梨鈴木文書）には「早雲寺殿様、駿州石脇御座候時より申合」とあり、早雲のことを早雲寺の殿様と表現しています。

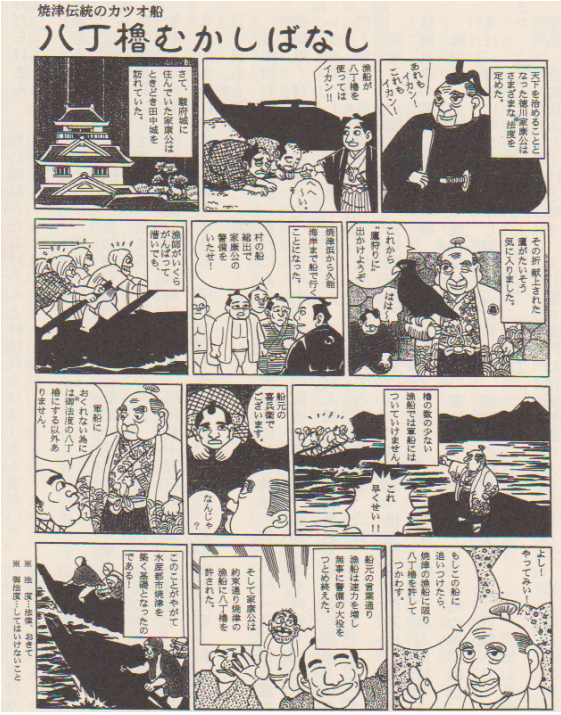
歴史的には「北条早雲」と呼称をすべきではないかもしれませんが、名前一つにも興味深い歴史の奥行きがあることを認識しつつ、本書では一般に広く知られる通り名として使用しています。

(1521-1573) の駿河侵攻によって、今川方が守る花沢城で激戦がありました。花沢城には今も当時の曲輪や堀切といった防御施設が残り、往時を偲ぶことができます。花沢城を落とした信玄は藤枝市の徳一色城（田中城）へ進軍しこれを落としました。徳一色城には小川城主の長谷川正長が入っており、この前後、小川城は廃城になったと推測されます。なお、市内には武田氏に由来する神社や、武田の末裔という家も残っています。

武田信玄の駿河侵攻の後、西からは徳川家康 (1543-1616) が軍を進めました。大崩の当目砦や青木の森古戦場は徳川氏と武田氏との戦いで知られ、市指定文化財には家康と当地との関わりを伝える古文書があります。また、焼津市は徳川家康伝説も多く残っています。他地域でも語られる家康の敗走伝説に関係する伝説もありますが、武威を示した逸話のある旗掛石の話や、家康が八丁櫓を許して後、焼津のカツオ漁が発展した話など、当地に特徴的な伝説もみられます。

写真 2-5　海蔵寺の本尊厨子の葵紋（小川地区）

写真 2-6　八丁櫓（復元）



NPO 法人焼津八丁櫓まちづくりの会作成『焼津市史』民俗編より

図 2-6　八丁櫓のむかしばなし

（5）徳川治世と漁業・農業・文化の発達－江戸時代－

江戸時代の旧大井川本流域以北（26 頁　図 2-1 参照）は、田中藩領と幕府領、他藩などの領地が時期により範囲を変化しながら続いていました。現大井川左岸域は遠州分に属し、同じく掛川藩や旗本領などが時期によって変化していたようですが、具体的に分かっていない部分もあります。

徳川家との強い結びつきは、前記した家康伝説のほかにも市内に点在しており、徳川幕府樹立の功労者といわれる井伊直孝 (1590-1659) や、紀州徳川家初代の徳川頼宣 (1602-1671)、田中城城主を世襲した本多家などに関連する史跡や寺社の文化財があり、一部は市指定文化財として保存されています。

漁業の発展に関する八丁櫓伝説のほか、家康に生のカツオを献上したとの記録が残る焼津では、江戸時代に漁業が大きく発展しました。浜通りにはカツオ漁に従事する人々が多く、和田浜ではサバやイワシなどの網漁が盛んで、漁法や漁具の改良、漁場の拡張などが進みました。漁業の発展に伴って、漁業権の問題も発生し、村々で争論が起こったことも記録されています。漁業に関係する鰹節製造は江戸時代の記録に残っていますが、文政 5 年 (1822) の

「諸国鰹節番付表」では焼津の文字は小さく、焼津節生産地としての一大飛躍は明治時代を待つことになります。

戦国末期以降、現市域中央部を流れていた大井川は現在の本流に近い位置に南下し、焼津の平野部全体に支流が網の目のように流れていました。市域の中央以南は江戸時代から新田開発が進み、散居村が形成され、大井川のもたらす肥沃な土壌と豊富な湧水を利用して農業が盛んになりました。大井川は豊穣をもたらす一方、しばしば氾濫することから、輪中や舟形屋敷で田畑家屋を守る工夫がなされました。なお、海浜部では、浜通り周辺で特に砂浜の海蝕が進み、代官所へ堤防の築造願いが出されるなど、平野部でも海浜部でも水害との闘いが続いていました。

山地には花沢地区に代表される山村集落が形成され、紙の原料である楮やアブラギリ（毒荏の木）などの商品作物が栽培されました。高草山山地は平地、海浜部への燃料供給地でもあり、山の暮らしと海や平野の暮らしはお互いに依存しあっていました。

日本坂峠越えの街道が通り、海運による交通の要所でもあった焼津では、江戸時代に一段と人々の交流が活発になります。大井川地区には江戸幕府老中田沼意次（1719-1788）が整備した旧相良街道跡（田沼街道）が残っています。遊行僧として知られる木喰五行上人が残した仏像も、焼津市域での交流史の一端を示す文化財ともいえます。大井川地区には六十六部廻国巡礼関係の文化財があり、焼津から全国を巡礼したことを示す資料のほか、他国から焼津にたどり着き、この地で亡くなった人を丁重に祀った碑などが残ります（50 頁　図 4-3）。大富・和田地区を中心に残る川中島八兵衛の碑も、他所から来訪して焼津に定住した人物を信仰したものです（同図）。

江戸時代には俳諧や書画をたしなむ人々があらわれ、大井川地区には「六鯨舎」という俳諧の同人組織がつくられており、句碑が残っています。算学者の古谷道生（1815-1888）は下小田の出身で、数学道場を開き弟子を育てました。

なお、幕末には咸臨丸に乗って洋行した益頭駿次郎（?-1900）や、幕末の志士として活躍した村松文三（1828-1874）などの人物を輩出しています。

（６）飛躍する水産業、ダンナ村を生んだ農業－明治・大正・昭和前期－

明治時代から大正時代、焼津の産業はさらに大きく発展します。漁船の近代化による遠洋漁業を積極的に推進した焼津の水産業は大きく飛躍し、鉄道敷設による流通網の整備も手伝って鰹節に代表される水産加工業の発展も目覚ましく、名実ともに漁業のまちとなりました。焼津の鰹節は「焼津節」と言われ明治以降、全国に知れわたり、日本各地の伝習所にその製造技術を伝える講師が派遣されました。

大井川地区では豊富な伏流水と豊かな米を利用した酒造が盛んで、大井川の水害と戦いながらも、稲作を中心とした農業が発展しました。高草山山地においては明治後半から茶とミカンの栽培が活発になり、特にミカン栽培は急速に普及し地域を潤し、花沢地区は「嫁に行くなら花沢」「ダンナ村」といわれるまでになりました。

写真 2-7　明治時代の鰹節乾し場

港や鉄道の駅を持つ焼津は物流の拠点でもあり、水産加工品や農作物が集まり活気を呈していましたが、昭和恐慌下で漁業、農業は深刻な痛手を受けるなど、経済は常に盤石だった訳ではありません。さらに戦争という大きな時代の流れが起こり、漁船は軍に徴用され多くが撃沈され、焼津漁業は壊滅的状況に陥り、焼津市街も空襲を受けるなど、苦しくつらい時代もありました。

（7）第五福竜丸事件

戦争で大打撃を受けた焼津でしたが、戦後に焼津漁港、小川漁港の築港を進め、漁業のまちの活気を取り戻そうとしていました。復興へと向かう昭和 29 年（1954）、焼津を母港とするマグロ漁船、第五福竜丸（だいごふくりゅうまる）がアメリカによるビキニ環礁での水爆実験で被災する事件が起こりました。この水爆実験では第五福竜丸だけでなく全国の漁船が被災していることが後に判明します。水揚げされた魚からは高い放射線が検出され、魚は売れなくなり焼津の漁業関係者の倒産が相次ぎました。戦後の立て直しを推し進めているなかで、焼津はまたも大きな打撃を受けることになりました。この事件を後世につなげ核兵器廃絶の礎とすることを期して、昭和 60 年（1985）に「核兵器の廃絶を願う焼津宣言」が採択され、焼津市歴史民俗資料館に第五福竜丸コーナーが設置されています。

写真 2-8　歴史民俗資料館内「第五福竜丸コーナー」

参考資料：『浜当目の民俗』（焼津市発行）

図 2-7　青木の森のむかしばなし

参考資料：『焼津市史』『やいづの昔話』（焼津市発行）

図 2-8　井伊直孝のむかしばなし